

Title	前嶋信次譯, イブン・バットウータ, 三大陸周遊記
Sub Title	
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.1 (1955. 4) ,p.130- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550400-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前嶋信次譯 イブン・バットウータ

三大陸周遊記

(昭和二十九年八月)
河出書房

西曆第一四世紀に阿・歐・亞三大陸を旅行してモロッコから中國に及ぶ周遊を行ったイブン・バットウータは記録を残した旅行家中で、史上最も多くの國を遍歴した人であらうと言はれる。有名なマルコ・ポーロはイブン・バットウータとほぼ同時の人であるが、その行程距離に於いても、旅行記の分量に於いても、到底前者は後者に敵しない。従つてイブン・バットウータの旅行記はマルコ・ポーロの旅行記に比べて、史料的价值が伯仲するばかりでなく、寧ろ優る所さへあるとされてゐる。然るにマルコ・ポーロの翻譯や研究は汗牛充棟もたゞならずといふ程、澤山あるが、イブン・バットウータに關するものは餘り多くない。それはイブン・バットウータが歐洲人でなく、その旅行記が歐洲に知られたのは漸く十九世紀に入つて後のことであつた等の事情に基づくものに過ぎないのである。アラビア學の進んでゐる歐洲學界に於いてさへ、この有様であるから、我が學界がイブン・バットウータに關する研究を全く皆無に等しい状態で放置してゐたのも餘儀なき次第であつたかも知れぬ。實際、我々は從來、イブン・バットウー

タの抄譯一つすら持たなかつたのである。我が國の東洋學は世界の水準にあるとはよく言はれることであるが、その誇る東洋學とは極東に關してだけであつて、同じ東洋學でも西亞に關する研究はかくの如く、なほ基礎的な仕事さへ着手されてゐなかつたのは極めて遺憾なことであつたと思ふ。

この度び、本塾文學部講師前嶋信次博士が本譯書を公刊されたことはこの意味に於いて頗る意義があると考へる。本書は世界探検紀行全集2として出され、一般向の通俗的な書物の形式を借りてゐるが、卷末の解説に譯者が詳記する如く、最も權威ある原典に基き、煩雜なところをはぶき、約三分の一に節略して譯出したものである。本譯書の内容はイブン・バットウータの故郷なるモロッコのタンジエル出發からアフガニスタンに至る前篇と、インド入國以後の後篇とに分れ、なほ卷頭に譯者まえがき、卷末に解説及びイブン・バットウータ年譜が附してある。また旅行各地域ごとに行程ルートを示した地圖が載せてあつて、讀者の理解の便を計つてある。譯文は極めて流麗で、興味深く全篇を通讀させる。旅行中に見聞した各地の奇習、風俗、景觀、事件等々、單なる物語として讀んでも誠に面白く、アラビヤン・ナイトを讀むやうな趣きがある。特にイスラムのいろいろな習俗を自然に會得させられること等はこの書の有難いことの一つであると思ふ。しかし我々歴史を學ぶ者にとつて、何よりも貴重なのはやはりこの書

の史料的价值である。例へば「南インド沿岸のヒナウルの王はこの邊の海上一帯に勢力を張り、六千の歩騎兵を擁してゐるからマラーバル地方の民は毎年、一定の貢物を納めてゐる。熱烈なイスラム教徒であるが、異教を奉ずるハルヤブといふ王に従つてゐる」(本譯書二八二頁)といふ記事があるがハルヤブとはヴィジャヤナガルの君主ハリハラ一世を指すのであり、これによつてマラバル海岸は當時、ヴィジャヤナガルの勢力下にあつたこと、従つてヴィジャヤナガルと支那との間に交通があつたといふ支那側の記録の正しさを證明することが出来るなどは私にとつて最も興味ある記事の一つである。この外、本書の記事全部が十四世紀頃の史料の寶庫といつても差支へあるまい。本書の重要性については既によく知られたことで、こゝに喋々するまでもない。これ程、有用な書であり乍ら、本譯書が抄譯であり、また注釋を缺くことは本叢書の通俗的性格から當然であるが、誠に惜しく思はれる。

博士が將來、本書の全譯注を公刊されることを我が學界のため
に待望するものである。
(和田博徳)

彙報

柴田常惠氏の訃

考古學界の耆宿柴田常惠氏が昨年十二月一日、享年八十三歳をもつて永眠された。

氏は考古學が未だ搖籃期にあつた明治三十年代から早くも東京大學の人類學教室にあつて活躍され、大正九年内務省に移つて後は、史蹟名勝の調査、保存は盡瘁され、戦後も文化財専門審議會の委員として、最後の日までこの方面の事業に力をつくされた斯界の長老である。

昭和四年本塾大學文學部講師となられてより、十五年の長きに亘つて考古學を講じ、後進の育成に當られると同時に、日吉臺附近における古代遺蹟の發掘調査を指導し、更に中國考古學調査團の派遣、考古室の創設もまた氏の努力によつて實現を見たのであつた。かように本塾における考古學研究の基礎を築き、その成果を内外に知らしめた功勞は大きく、われわれの深く感謝して止まぬところであり、こゝに謹んで哀悼の意を表し、御冥福を祈る次第である。